

## 「最後の晩餐」(ルカによる福音書二二章一四〜二三節)

### 1 最後の食事

今週の水曜日一七日から、教会の暦では受難節に入ります。四月四日が今年復活節(イースター)です。

この間日曜日は七回あります。予定としては、ルカによる福音書によって十字架へのイエスの歩み、受難の歴史を辿りたいと思っています。昨年はじめたルカによる受難史の学びの続きになります。

受難史、あるいは受難物語といった場合、もちろん福音書全体がある意味で受難物語なのですが、しかし一般には、イエスのエルサレム入城以降の出来事を指して受難史と申します。

私どものこのルカによる福音では一九章二八節からです。そこからはじめて昨年度は九回にわたって学びました。今回で通算すれば十回目です。最後の晩餐の記事からは始めることになりません。

春先、ユダヤは、過越祭、あるいは徐酔祭と呼ばれる、一年でもっとも大きな祭りの季節を迎えます。エルサレムには神殿があります。イスラエル各地から巡礼者が訪れます。他国に住んでいるユダヤ人も帰ってきて、町は大変なにぎわいを呈するときです。

そのエルサレムに、聖書によれば、イエスはロバの子に乗って入られます。人々は自分の上着を道に敷いたり、棕櫚(シュロ)の木の枝を切ってきて敷いたり、それをいわば絨毯(じゅうたん)代わりにして道をつくったのです。その日は、後に、シュロの日曜日とも呼ばれるようになります。そこから一週間が受難週です。次の日曜日の朝イエスは甦ったのです。

エルサレムでイエスは毎日、神殿に来て、境内で、そこに来ていた民衆に福音を説き続けます。その意味では、ガリラヤで宣教を開始していらい、これまでしてきたことをし続けられたのです。

ただ癒やしを行ったという記事はないようです。むしろ多くなるのは、聖書の小見出しにあるような「問答」、論争です。というのも、イエスに敵対し、陥れ、亡き者にしようとしていた勢力との対立、あつれきが大きくなったからです。その勢力として宗教の側では、祭司長、ファリサイ人、律法学者、あるいはその回し者ら、が挙げられます。政治の側では、ローマによる政治体制を支持していた長老たち、ヘロデ党などの名が挙げられます。彼らとの問答も論争も、宣教には違いありません。

エルサレムに入ってから、イエスはそうした、今まで以上に強い緊張の中で人々を教えられます。この間、弟子、あるいは使徒の姿が背後に退き、あまり出ていなくなつたことに気がつきます。しかしここにきて現れます。それが彼らとの食事でした。なおここでは、弟子ではなく使徒という呼び方で出てきます。

今度の場合、食事をし、腹ごしらえをして、また神殿で宣教を続けようというのではなさそうです。そうではない緊張がここから伝わってきます。むしろそれは宣教活動がいよいよ終わることのしるしです。

再びまたイエスと弟子たちとの交わりが強く表に出てきたということは、言葉を換えていえば、イエスはこの食事、過越の食事を共にすることなしに、十字架への道を歩もうとしなかった、弟子たちと別れようとしなかったということです。そしてそれが最後の晩餐でした。問いの形で言い直せば、いま最後になぜ過越の食事をイエスはなさろうとしたのだろう、ということなのです。

## 2 過越の羊として

過越の食事としての最後の晩餐、それなしにイエスは受難の道を歩むことはなかった、弟子と別れようとしなかったといま申し上げました。その意味の一端が、今日の最初のところに、すでに現れているように思います。

時刻になったので、イエスは食事の席に着かれたが、使徒たちも一緒だった。イエスは言われた。「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいとわたしは切に願っていた。言っておくが、神の国で過越が成し遂げられるまで、わたしは決してこの過越の食事をとることはない」(一四〇一六節)。

ここで私どもが、何より聞き逃してならないのは、「わたしは切に願っていた」という言葉です。ここで使われている言葉は「欲望」という悪い意味でも使われる強い言葉です。「切に願っていた」は、直訳すれば「願いを願っていた」。これ以上ない気持ちの表明です。

イエスはじつさい周到に準備してきたのです。ペトロとヨハネ、イエスがもつとも信頼していた弟子二人に準備を命じたことが、今日の箇所直前の段落に書いてあります(七〇一三節)。しかもそこを読めば、イエスご自身がそれを留意していたことが明らかです。いよいよその「時刻になった」。それは、イエスの受難の時が来たことも暗示しています。

この俗に最後の晩餐と呼ばれるイエスと使徒たちの最後の夕食、これは「過越の食事」でした。イエスが弟子たちと共にすることを望んだのは、まさにこの「過越の食事」であったのです。

「過越の祭」の期間に、各家庭で、あるいは友人同士が集まって開かれるのが「過越の食事」です。過越の祭とは、ご承知のように、かつてモーセに率いられ、イスラエルの民がエジプトを脱出した(紀元前一二八〇年頃)、いわばその脱出感謝記念の祝祭です。

エジプトで奴隷のような生活を強いられていたイスラエルの人々は、神の命令によって、脱出の準備をします。羊を殺し、その血を家の入り口の柱に塗り、血塗られた家を神は「過越」してイスラエルは神の裁きを逃れたのです(出エジプト一二章)。

この故事にちなんで毎年この時期に行われていたのが「過越の食事」です。羊をほふり、肉と酵母菌を入れないパンを食べる。もちろんぶどう酒も飲みます。そしてその席で「この儀式にはどういう意味があるのか」と子供に質問をさせて、家長が、友人同士なら、主催者、ホストがということになるのでしょうか、出エジプトの恵みを

語り聞かせるというものです。

今日の聖書箇所が伝えているのは、まさにこの過越の食事でした。ただその持ち方は時代とともに変化し、当時はギリシャ・ローマの習慣が取り入れられるようになっていたようです。座席は馬蹄形で、円くなっているところにホストが座ります。座る場所も、立場や身分によっても異なることがあったようです。イエスは「席に着かれた」とありましたが、この言葉は寝そべるという意味です。リクライニングです。ギリシャ・ローマの「饗宴」(宴会、酒宴)のスタイルが取り入れられていたことが暗示されています。

もちろん過越の食事の各要素は、昔から受け継がれてきたものです。何回か杯が取り上げられ、祝福の言葉が語られ、たとえば詩編一一三編や一一四編のハレルヤ詩編が歌われます。その中で注目すべきことは、先ほども少し触れましたが、食事の途中で子供が質問し、家長が説明するという場面です。じつは、これが、過越の食事でもっとも重要な場面なのです(出エジプト一二・二六〜二七)。今日の箇所には質問はありませんが、想定される質問への答えはあるのです。

それから、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えて、それを裂き、使徒たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」。食事を終えてから、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である」(一九〜二〇節)。

想定される質問(この儀式にはどういう意味があるのですか)に対する答えとは「これは……である」、「この杯は……である」という言い回しです。ですから「これは……」という言葉はこのパンだけ、この杯だけを指すのではなく、こうして行われる儀式全体を指していると考えられることもできるように思います。この辺はもう少し勉強してから、申し上げることにします。

いずれにしても、注目すべきことは、イエスご自身によって、自分がしていることの意味が説明されていることです。わたしは過越の羊としてほふられると語っておられるのです(コリント五・七)。そしてこれこそが、「苦しみを受ける前に」(一五節)、十字架の出来事の前に、弟子たちに明らかにされなければならなかったことでした。かつての出エジプトのときのように、いま「あなたがた」は過越の羊としてのイエスによって罪の呪いから解放され、神との交わりの中へと回復されるのだと。「新しい契約」という言葉をイエスは使っています。それは、それまでイスラエルに与えられた、たとえばノアを通して、あるいはアブラハムを通して与えられた旧い契約を無効とするではありません。むしろそれを確かなものとし、更新し、私ども、ユダヤ人ではない、すべての異邦の民が神の救いにあずかるようになるための約です。それが「新しい契約」です(ローマ一五・八〜九参照)。

### 3 定められた通り

さて今日の箇所最後の数節は、どのように理解されるべきなのでしょう。イスカリオテのユダの問題です。

しかし、見よ、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に手を食卓に置いている。人の子は、定められたとおりに去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。そこで使徒たちは、自分たちのうち、いったいだれが、そんなことをしようとしているのかと互いに議論をし始めた(二一―二三節)。

有名なダ・ヴィンチの「最後の晩餐」、裏切る者がこの中にいるという指摘によって弟子たちのあいだに引き起こされた突然の激しい動揺の一瞬をとらえた、名作中の名作です。ルカによる福音書では、いまお読みしたこの箇所が、その絵の背景にある聖書の言葉です。

ただ、裏切る者がいるとの指摘ですが、マタイによる福音書とマルコによる福音書では、この言葉が、イエスの聖餐の言葉の前に置かれているのに対して、ルカではその後、少なくともそれに続いています。

そうした違いはあるものの、マタイ、マルコ、ルカ、これら共観福音書がみな認めているのは、イスカリオテのユダも、最後の晩餐に、主の晩餐にあずかっているという事実です。

むしろルカはこの事実を、他の福音書より、重い事実として受けとめている、そのようにも見えます。というのも、マタイやマルコには、「人の子を裏切るその者は不幸だ」という言葉が続いて「生まれなかつたほうが、その者のためによかつた」というような言葉があります。ルカにはありません。また、ユダがイエスにまさかわたしのことではと問うたのに対して、マタイには、「イエスが「いやあなただ」(二六・二五、口語)と返答しているところがあります。「裏切る者」は文字通りには「引き渡す者」です。ルカは個人を特定することより、神のあわれみを強調しているようにも思えます。神の国の食卓を示す最後の晩餐、そして主の晩餐、そのテーブルは開かれているとルカは語っています。

ユダによってイエスの十字架が引き起こされ、神の救いが成就するわけではありません。「人の子は、定められたとおりに去って行く」のです。神のみこころによって救いが実現するのです。

イエスは、ユダにも、ご自身の十字架による救いを差し出していきます。ユダに「も」という言い方は正しくない、ユダにこそと言わなければならぬかも知れません。ユダの罪は、可能性において、残りの一人の弟子たちの罪でもありました。イエスを十字架に引き渡す、その引き渡しの連鎖に、残りの一人の弟子も、イスラエルの宗教の指導者はもちろん、民衆も、そして異邦人も、ピラトならびにその兵士たちにおいて、手を貸しているのです。イエスがパンと杯を与えようとしたとき、その視線の先にはユダがいた。むしろそのユダにおいてイエスは自らの十字架が不可避なことを見て取った、神のみこころを見て取った、それが今日の箇所でも明らかになっているように思います。